

---

# 何が為に月は照らす

山彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何が為に月は照らす

### 【Nコード】

N0903C

### 【作者名】

山彦

### 【あらすじ】

それは、禁忌という名の純粋な願い。その先にあるのが幸福でないことと知りながらも歩む者達。彼ら突き動かすのは確固たる信念のみ。数奇な運命は彼らを引き寄せる。その願いは望んではいけないものだったのか。これは、望んでしまった者達の醜くも純粋な物語。

## プロローグ（前書き）

何分処女作なもんなんで感想や、ご指摘等して頂ければありがたいです。週1ペースで書けるようがんばります！

## プロローグ

黒の男は繁華街を歩く

人の気配はなく、死んだように静まりかえっている

いや・・・

『よつに』ではない。現にこの町は『死んでいる』

風と一緒にかすかな死臭

綺麗に片付けているようでその実仕事が粗い  
所々に人であったものの『名残』が残っている

黒いコートに身を包んだ男は尚も繁華街を歩く

立ち止まると時折雲間から覗く月を見ていた

歩くのに少々飽きた

何しろなかなか手を出してこないのだから

こんな時は月を見る

今夜の月も綺麗だ。

青白く光を放つ月は闇おも暖かく包み、こんな自分でさえ優しく照

らしてくれる

しばらくすると、また月は雲に隠れてしまった。

辺りはまた暗闇に戻される。

残されたのは男と月の代わりの『敵』だった

死臭が一層増す

『随分と慎重なんだな』

男はまた月が出まいかと上を見ながら言った。

『・・・』

『おまけに口も聞けないらしい』

視線を戻しそこにいる『敵』を見据える

元の人間の形を残してはいるが眼は赤黒く光を放っていた。

手も三本目が生えており、その手からは長い5本の爪が動かす度に鉄同士が擦れるような音がしていた

『既に侵食は2段階目か』

別段男に焦った風はない。ただその現状を繁々と見ていた。

『……………』

地が震えるような咆哮を上げるとその『敵は』跳躍した。  
その高さは悠々と辺りの建物を飛び越え尚も上昇している

『これはこれは』

ちよつど男から見ると、それは月をバックにしており、何か一枚の  
絵画を見ているような気分だった。

『いいねえ、気に入った』

落ちる速度を利用し、その爪で男を八つ裂きにしようとする化け物。  
その者の自重に重力が加わり速度は見る見るうちに増していった。

『お前は特別に』

『……………! ! ! ! !』

『一撃で殺してやるよ』

咆哮を上げながら寸分の狂いもなく男目掛け落下する『敵』

『敵』を感慨深げな顔で見ている男

その刹那

辺りにすさまじい衝撃音と爆風

一面の土煙に辺りの視界が0になり、それと、同時に辺りに静けさ  
が戻った

数秒の後

その決着を見に来たかのように月がまた雲間から顔を出した

月明かりが土埃を払う

そこには先程と同じように月を見上げている男と、首のなくなった  
『敵』がいた。

いつの間にか月の回りにはボウっとした月の傘がでていた

『明日は雨か』

男は見上げたままポツリと呟いた

## 1、ツゴモリの月

思い知らされるのは現実の厳しさ。

研鑽した膨大な知識など、現実では何ら意味を成さない。

ただ思い知らされる、そこに在る現実。

しかしそれもしようがない。

それが現実であり、それが私の望んだものなのだから。

ただ、ふと考えることがある。

今の私は、昔の私にはどのように見えるのだろうか？

無力で情けない姿に哀れむのだろうか？

生きる為に必死にもがく姿を滑稽だと笑うのだろうか？

今の努力を無駄にするなと怒るのだろうか？

そう考えること自体、私の心にどこか迷いがあるということなのだろう。

しかしそれこそが現実。

如何に言い繕うと、隠しきれぬ真の真実。

そうしてそれを知った今、同時に多くのものを失っていたことに気付く。

結局、私は何一つ成長できていない。

## 一、彼女の場合

今日も彼は月を見ている。

毎夜の習慣らしいが、・・・よく飽きないものだ。

ただ満ち欠けを繰り返す月と、瞬くばかりの星を見て彼は何が楽しいのか。

・・・いや、彼にとってはそんな単純なことがいいのかもしれない。彼と同じように空を見上げる。

いつもと同様の新円がそこにあつた。時折雲に隠れるが、ただそれだけ。

そんな風を感じてしまうのは、元々私にそんな殊勝なものが備わっていないからか、それとも、人より少し長く生きた時間が、それを錆付かせてしまったのか。

なんにせよ、今の私には夜空の月を見たところで、湧き上がる情感など何一つないのだ。

代わりにただ感じるのは、この季節特有の身を切るような寒さと、

グウ~~~~。

隠しようのない空腹だけであつた。

・・・しょうがないじゃない。

生きる上で暖かい住居と食べ物に欠かせない。

ましてや「月が綺麗・・・」なんていうのはそれらが満たされて初

めて感じられることであって、・・・うん。私は間違つてないわ。

寒さをしのぐ為の焚火に手をかざしながら、少女はそんなことを思った。

アッシュブロンドの髪は腰まで伸び、真っ赤なりボンで結わえている。瞳は海のように深い蒼。体の割に少し大きめの外套に体を包むその様は、少女特有のあどけなさを残しつつもどこか大人びた雰囲気醸し出していた。

それもそのはず、少女 エル は少女ではない。れっきとした大人である。

さらに言うなら彼女の年齢は300をゆうに超えていた。

その年齢に反し、その体は幼女のそれである。つまり、『体は子供、頭脳は大人』というやつを地で行っているのだった。

そんな彼女が、自分の腹から発した咆哮を聞かれていないかと彼を見る。

当の彼 ジール は気付いた様子もなく、未だ空を見上げていた。

端正な顔立ちに流れるような金髪。碧色の瞳にすらりと伸びた手脚。ただ見上げて立っているその姿すら絵になるような、いわゆるいい男というやつだった。

この一見すれば誰もが見惚れるような美男であったが、ことエルにとっては全くもってアウトオブ眼中であった。

エルの好みは筋肉隆々、香水の代わりに汗の匂いがプンプンするよくなイスガイで、キザに口説く優男ではなく強引に奪っていくよくな、そんな熱い漢おとしが好みであった。

つまりその男、ジールはエルにとってはむしろ嫌いな部類に入っていたのだった。

エルにとって、彼が月に魅入るその姿などナルシストぶりを遺憾無

く發揮しており、見ているだけで虫唾が走りそうであった。何度その後ろ姿を蹴飛ばしてやるうかと考えたことか。だというのに、今こうしてエルはジールと共に旅をしている。もちろん成り行き上しようがなくではあった。加えて言えば彼女の欠点のせいでもあるのだが、とにかく、彼女にとつて彼は精神衛生上あまりよろしくない存在なのであった。いろんな意味で。

二人は仕事の途中だった。一般的にいうなら時間外労働、残業というやつだ。

本来なら今頃二人は家に戻り、思い思いの時を過ごしているはずなのだが、今回「モ」ジールが足を引っ張った。

作業自体が単純なものであった上に、エルは他にやることがあった。その上ジール本人がやる気を見せていたため、一抹の不安はあったものの任せてみたわけだが……。

結果は見事に失敗。目標には逃げられ、二人は寒空の下で夜通し搜索するはめとなった。

本来なら休まず搜索を続けるべきなのだが、予想以上にこちらの消耗が激しいという事と、目標もそう遠くへは逃げられないと判断した二人、というかエルによる提案により、取り敢えず僅かばかりの暖と食事を取ることとしたのだった。

焚火の脇に刺した串から、よく焼けた香ばしい匂いが漂っていた。

近くを流れる小川から獲った山女だった。サイズも30センチ台と大きく、産卵期が近いため油がのっけていてうまそうであった。エルは焼けた山女を取ると対面に座るジールに無言で手渡した。

「ほお、これは山女だね」

「繁々と見つめながらジールは言った。」

「……」

「山女はね、からだの斑点が特徴であり、溪流の女王として、「山女魚」(やまめ)という名前がついたという説と、メスが海から戻

つてくる間、オスがやもめ暮らしをすることからその名がついた、  
という二つの説があるのだよ」

「・・・」

「ちなみにやもめ、というのはだね・・・」

「・・・夫のいない女、夫を失った女。またはその逆・・・」  
黙々と食べながらエルは答えた。

「・・・ふむ、その通りだ」

暫しの静寂が訪れる。

ふとエルがジールを見ると、ジールは未だ魚に口をつけていなかった。  
た。

串を持ったままあちこち観察したり「ほお」だの「ふむ」だのと言  
つたりしている。

「・・・魚、嫌いなの？」

「いや、そういうわけではないのだが・・・」

ふむ、と何か困っているようだった。

「なら、何？」

少しイラっとした。ちなみに「嫌いだ」と言ったら奪い取って食べ  
てやろうと考えていた。

「申し訳ないが、ナイフとフォークはあるかな？あと、できれば皿  
などがあると助かるのだが」

「・・・」

エルは改めて自分が彼を嫌いであることを再確認した。

「・・・あのねえ、この状況でそんなものがあると思う？ガブっ  
といけばいいのよ！ガブっ！」

エルが見本とばかりに魚にかぶりつく。ちょうどいい塩加減が淡泊  
ながらも奥深い味を引き出している。我ながらなかなか、と自画自  
賛していた。

それを見たジールは、はじめ戸惑っていたもののなんとか魚を口に  
した。

しかしそれはかぶりつくというにはあまりに女々しく、エルはなる

べく彼を見ないように食事をすることにした。

「ふむ、なかなかの味」

「・・・そりゃどうも」

「淡白でありながらそれでいて奥深い、白身魚の旨みを引き出す絶妙な塩加減だ。これで魚の臭みが無ければ言うこと無しなのだ」

「・・・」

「ライムやレモン、ハーブといったものにつけると臭みがとれるのだよ」

「・・・」

「あとやはり見栄えがね。付け合せなどあるといいとは思うのだが？」

「・・・」

シルビアはあと一本手があれば耳を塞いで食べられるのに、などということを本気で考えていた。

その後、食事中はジールの独壇場となり、そこに会話と呼べるものはなに一つなかった。

食後すぐ、エルはお気に入りのマントに身を包むと早々に横になった。

気分が悪いというのもあるが、その目的は体力の回復である。

連日の激務に加え、一日中ジールと一緒にいるというのは想像以上に堪えたのだった。仕事に支障をきたすようなものではないが、次に失敗はできない。大事をとってのものであった。

だというのに、焚き火の対面に座る男はまた月を見上げていた。その表情は完全に月に魅入っている。

「・・・明日は朝一で出るからもう寝ときなさい」

一応年上として忠告はする。だが当の本人はというと、

「大丈夫、私はこう見えて夜更かしは得意でね。それに初めての野宿だ。もう少しその余韻に浸っていたいのだよ」

さらに月を見上げたまま、彼は続けた。

「それに誰かが火の番をしないとイケないと思ってね。さすがに今日は冷えるから。君は寝ていたまえ」

ああ、いかんわりや

「・・・そうね。じゃ、よろしく」

そう言うとエルはマントにうづくまった。

何も考えず寝ることに集中する。

これ以上彼に構うのはこちらの眠りに支障をきたすと判断したのだ。つた。

取り敢えず目を閉じ、頭の中で彼を100回程瞬殺し、なんとか平静を取り戻すとエルは穏やかな眠りについたのであった。

## 二、彼の場合

「・・・ふう」

溜め息が自然と零れる。

慎ましやかな白光は趣深く、刻一刻と変わるその形は見るものを飽きさせない。

誰にでも平等でありながら、決して誰のものにもならない孤高な存在。

まさに自然が作り出し至高の芸術、人に作り出すことなど到底叶うはずがない。

「・・・はあ」

ふと、寒気がしたので焚火を見ると、少々火の勢いが弱まっていた。先程集めておいた（エルが）薪をくべると、火はまたもとの勢いを取り戻し、辺りに暖が戻った。

その対面ではマントに包まったエルが顔だけを出し、小さな寝息をたてながら眠りについていた。

早々に寝てしまつには今日の月はもつたいたいと思つのだが・・・見上げた月は雲間に隠れようとしていた。今日しか見ることのできない今日の月。この寒空によく映えている。それを見ていると感慨深い気持ちになり、いつの間にか物思いに耽つてしまつたのだつた。

彼女位になると、この程度のことでは感動すらしなのだろうか？ 普段の彼女は容貌とは裏腹に実に冷静だ。

私の問いにもいつも簡潔な答えを与えてくれる。無駄なく合理的といえる。

欲をいうなら、もう少し明るく振舞つたほうが彼女のためにはなると思つのだが・・・

私が見る限りでは、彼女は常に不機嫌そうな顔をしている。

まあ、それはしょうがあるまい。

それが彼女の生きてきた証。

恐らく、彼女が見てきた色々なものがそうさせているのだろう。

私の知らない綺麗なもの、楽しいもの、哀しいもの、醜いもの・・・

それらが形作つたものが今の彼女なのだろう。

「・・・」

・・・まあ、なんにせよ彼女には感謝している。

このような無知な私を連れ、旅を共にしてくれているのだから。彼女のおかげで私は沢山のことを学んでいる。

果たして彼女に出会わずして今の私があるであろうか。目を閉じ想像を試してみる。

「・・・ふむ」

一分後

「……」

「……まあ、そう思うからこそ常日頃、私なりに感謝の言葉はかけているつもりなのだが、どうにも彼女には伝わっていない節がある。彼女を見るとちょうど寝返りを打っていた。一見すれば無邪気な子供そのものである。」

「……むう。……ジール……」

寝言とは微笑ましいではないか。

「……ジールのアホお……むにゃ……」

「……」

「……コミュニケーションというのは難しいものなのだな、と最近よく思う。」

「どうでもいいと思われるのは簡単だ。何もしなければいいのだから。だが、いい関係を築こうとするととなると話は別だ。」

「金でどうこうなるタイプなら、今までいくらでも相手をしてきた。だが、どうも彼女はそういうものには全く興味がないらしい。むしろ、それがいけなかったのか、今では酷く煙たがられている気がする。」

「円滑な人付き合いというのは大変なことなのだな。気が付けば溜め息が出ていた。」

「だが、どのような相手であっても共通することもある。例えば誠意がそうだろう。」

「誠意を示さなければ信頼は得られない。その位は私でも知っている。つまり、今私に必要なのは彼女に対する出来る限りの誠意を示すということだ。」

問題はその誠意をどういった形で示すか、ということだが……。考えること暫し、寝息を立てるエルを見て、案外答えがすぐ近くにあることに気がついた。善は急げ、ジールは立ち上がると焚き火に少し多く薪をくべ、誠意を示すため森へと歩を進めるのだった。

### 三、白い野犬

私の数少ない友人は、この世界が好きだと言った。私にはそれが信じられなかった。すくなくとも彼は幸せではないはずだから。

彼は人より沢山の不幸を背負っている。その上さらに背負おうというのだから。

彼の言動は不可解で支離滅裂。

「この前3回も殺されちゃった」

意味不明である。笑いながら言うことではない。

「……はあ、また死ぬんだろうなあ。楽に逝ければいいんだけど……わざわざ私の所に来てそんな物騒なことを言わないで欲しい。だいたい、どこまで本気なのがわからない。

話し半分で聞いていた私は「嫌なら逃げれば？」と、いつもと同様に冷たくあしらう。当時は彼にかまう時間も惜しかった。

そして、そう言われた彼もいつもと同じように

「ほんとだよな」

と笑って答えていた。

当時の私には彼の言葉は全く響くことはなかったし、今も正直理解は出来ない。

だが、当時と今とで違つのは、彼の気持ちを少しは知ろうとする姿勢だろつ。

今思えば、彼がそんなことを言つたのは私にだけだつた。

当時は悪趣味か意地の悪い嫌がらせだとしか思えなかつたが、彼は彼で悩んでいたのかもしれない。

その言葉を言えば楽になれるのに、彼は決してそれを言うことはなかつた。

彼の置かれたその環境が彼にそうすることを許さなかつたのだろつか。

あれは、彼に対し無関心であつた私にだからこそ言えた、僅かばかり零れた彼の本音だつたのかもしれない。

そう考えてみると、英雄と言われた男も案外大したことないと思う。どこにでもいる。普通に死を恐れる人間だつたのだ。

まあ、それも憶測に過ぎないのだが……。

先程焚火をしていた場所から少しばかり奥へと進んだ、うっそうと生い茂る森の中。

枝葉を広げて生え重なる草木は月の光も遮り、辺りは闇に包まれていた。風もなく無音である。

その中でふと、ジールがそんな昔のことを思い出したのは、歩き疲れ少し頭が朦朧としているのと、目の前の野犬が昔の彼と同じ格好をしていたからだろつ。

まったく……

いるはずがないというのに。

前日に降つた雨のせいだろつ。泥濘るんだ地面に思いのほか体力を奪われ、上がった息を整えながら目の前の野犬を見る。距離にして10メートル。

目の前に立つそれは、この闇夜にも映える白い外套を身に纏っていた。  
肩口に見える翼を広げた鷲の紋章。この暗闇ではその程度しかわからない。

だが、とりあえずこの者が何者か、ということだけは十分に判った。

この世界において特殊な位置に在るもの。

人智を超越した能力を持ち、唯一死という枷を外された神の使い。

『使徒』

珍しいものに出会えた。果たしてこれは幸か不幸か。

「こんばんは」

そんなことを考えているとふと使徒の方から話しかけてきた。顔は暗くて判らないが、声色から判断すれば若い男という感じだろうか。  
「こんばんは。しかし挨拶とはなかなか殊勝なものだな」

「そう？人として当然じゃない？挨拶は。まあ、でも返事はあまり期待してなかったんだけどね」

くっ、と笑われたような気がした。

「どういう、意味かな？」

「いや、大抵の人はさ、駄目なんだよ、話しかけても。既に自我が崩壊してるっていうかさ。意思の疎通もままならない人が多いから・・・？」

「もう少し、わかり安く言ってくれないかね。君の喋り方はどうも理解に欠ける」

さらに言えば品位も欠けているが。

「そう？すまないねえ」

やはり、笑いながら使徒は言った。

「・・・つまりだ。あんたみたいな人は大体まともじゃないんだよ。あんたみたいに人を沢山殺している人はね」

そいつは言いながらやらしい笑みを浮かべたような気がした。

「……」

「わかるんだよ。隠していてもね。あんたに染み付いた血の臭いは、少しというには多すぎるから」

「……」

聞いたことがある。

確か、使徒というものは自分に害のあるものに過敏に反応するらしい。

その「害のあるもの」というのは使徒によって違うらしいが、どうやらこの保持者にとっては「血の臭い」がそれらしい。

「それで正気を保っているんだ、大したものだと思ってるね。俺なら耐えられないかな」

使徒はそういうとまた笑った。

「それでさ、そういうやつを協会に連れて行くと案の定、何かやらかしたりしてるんだわ。」

つまり、罪状が出る前に捕らえるということか。

あこぎなものだ。

「で、結論から言えば、今回は私を協会に連れて行くことというわけだ」

使徒はそうだと口を叩いた。

「できれば大人しく従って欲しいんだけど……」

……よく言う。

「……今まで、そう言って捕まってくれたものがいたかね？」

「……いや、でもあんたなら話が通じるかもと思っただけだね。」

「

……ペテンが。

「あいにく、私にその気は全くないよ」

「そうか・・・」

・・・残念だ。と言いながら剣を抜く。その手には刻印が刻まれていく。

初めから、生かすつもりなど毛頭もなかったろうに。

瞬間、その一体が戦場と化した。

爆音と衝撃で木々が削り飛んでゆく。

その全ての攻撃は使徒による斬撃であり、使徒の放つそれはいずれも一撃でジールを致死に追いやるだけの威力を持っていた。

その怒涛の攻撃をジールは全て紙一重で避けていた。

ぎりぎりの所で避ける。

ただ避けるのみでこちらからは攻撃はしない。

ジールは何度も身を過ぎる死を肌を感じつつも、ただその様を傍観していた。

自然と動く自分の身体を客観的に観ながら、ふと物思いに耽るのだった。

それは、しょうがないことなのだろう。

彼らにとって我々は完全な悪。

己の目的を果たすために人を殺める者が善であるはずがない。

この世界はそういう風に来ている。

人を殺すということは悪であり、それを行った人もまた悪である。

それが人として生きる上での常識であり、人が人として生きる最低限の条件なのだろう。

そうして、我々はその条件の中で生きている。

その条件の範疇においてのみ、己の望を叶えることを許されているのだ。

もはや、遣伝子レベルにまで染み付いたその条件は、大抵の者にと

つては意に介さないものだろう。それもそうだ、初めからそういう条件を踏まえた上での望なのだから。

だが全てがそれに収まるわけではない。人が作ったものに完璧はなく、その全てに例外が存在する。

私もまた然り。

私は望んでしまった。その条件を超えるものを。

叶えるために多くの犠牲が必要である望みを。

望みを叶えるのにそれが一番の近道だと知った時、迷う時間もなかった。

望みを叶えるために人であることを捨てるというのなら捨てよう。その為には悪になれというのなら喜んで悪になろう。

そう心に決め私は人を殺めたし、これからも殺めるのだろう。

理不尽なのは百も承知。

だから私は賭けをしている。

望みが叶うが先か、散るが先か。それだけのこと。

屁理屈なのもわかってる。

だから私は彼のように私を悪とみなす者と戦う。逃げることはしない。

それは、己の正しさを確かめるための戦い。

散る時は潔く逝こう。

だが、それまでは醜くとも足掻くと決めた。

私には、そうでもしなくてはやってはいけない。

そうして気が付けば、今回も私は賭けに負けないですんでいた。

目の前には無力化された使徒が背後を取られ、身動き一つとれなくされていた。

喉元には「鋭利なモノ」が突き刺さろうとしている。

今、この者の生きる権利は私が握っている。もう少しこれを差し込めば。これは息を引き取る。

一思いに殺ろうが苦しませて殺そうが、それも思いのままだ。身動き一つ取れない使徒からは先程までの余裕は消え、今はそのいつ迎えるかも知らぬ己の死に怯えている。

おかしい話だ。この世界で一番死とは縁遠いところにあるはずの存在が、こうして目前の一時的な死を恐れている。

本来なら我々と同類の化け物であるはずなのに。なぜそもこれは人のふりをしようとするのか。

・・・醜い・・・

「あ」

自然と手に力が入っていた。

気付けば使徒の喉元から血がドロリと流れ、先程以上に体は震えている。

でもこれはまだ死なない。この程度では一時的な死にすら値しない。卑怯ではないか、もはや人間ではないはずなのに・・・

こんなにも酷く醜く憐れだというのに・・・

いや・・・

・・・だが、だからこそこれは人でいられるのか。

喉元のモノを抜き、使徒の体を解く。

使徒は突然の開放に戸惑い、恐々とこちらを伺っている。

「・・・いきたまえ」

「・・・えっ」

初め、言われたことの意味が理解出来ていなかったようだった。そ

の顔の滑稽なこと。

やがて自分が助かるのだと知ると、神の使いと呼ばれる者は震える足で途中何度もよろめきながらなんとかこの場から去っていった。

それから暫く、ジールはそこに立っていた。眉一つ動かさず、ただ立っているだけ。

時間だけがゆっくりと過ぎて行く中、そこに『在る』だけのものになっただけ。

眼は開いているが何も映さない。

何かが見えているのに何も見えない。

それが何なのか知っているはずなのに、わからない。

不思議な感覚。

妙な浮遊感は何ぞか酷く落ち着いた。

ふと左手にいつもと違う感覚。

見れば左手がない。

いや、無くなったのではない。真つ黒な沁みとなって闇に溶けていた。

痛みは無くむしろ心地よさを感じる。

黒い沁みはやがて左手から徐々に体へと拡がり始める。

身体が溶け出していく感覚。

それがいけないことと知りながらもただそれを見つめている。

自分のことなのに他人事のように見ていた。

それは、しょうがないことだから。

契約と制約。

だがすまない。私はまだ何も果たしてはいないのだ。もう少し待っていてはくれまいか。

暫くすると黒い沁みは動きを止めた。

それと同時に先程までの浮遊感も消え、代わりに左手に微痛が走った。

見れば、左手から黒い沁みが引いていた

ありがとう。

消え行く黒い沁みを名残惜しくさすったのだった。

どれ位時が経ったかという頃、ふと何かを感じ我に戻った。

その何かが何だったのか。我に戻った時にはそのことすら忘れていたのだが、気が付けばいつもと同じように月を見ている自分がいた。先程の戦闘で周りの草木が全て吹き飛び、代わりに月が覗いていたのだ。

悪い癖だ。どうも最近考え事が過ぎている。

まだ少し惚けている頭を強制的に切り替える。

月の位置から現在の時間を推測。

よかった。思っていたより時間は過ぎていないようだった。

周辺には怪しい気配もない。

一応目的は果たした。後は彼女の元へと戻るだけだ。

ふと、先程見た彼女の寝顔が脳裏をよぎった。

普段は常に眉間にしわを寄せている彼女が、唯一素顔に戻れる瞬間。一体何にそんな気を配っているのかは私には皆目検討も付かない。

だがきつと彼女の事だ、無知な私には想像も付かないようなことで日々悩んでいるのであろう。

そんな彼女の数少ない安らぎの時間を守ることが出来たのだ。光栄ではないか。

だが、残念なのはそれに彼女が気付かないことか。

いや、別に見返りを期待しているわけではないのだが……。

そんな事を考えながら、ジールは妙な満足感を胸に抱き、元いた場所へと歩を進めるのだった。

だが、やはり現実というのは厳しい。特に私に対しては冷酷なよう  
だ。

その光景を見たのは、月は沈みかけ後数時間もすれば朝日も昇ろう  
という頃であった。

そこにはエルがいた。いや、いるのはけして悪くない。悪くないの  
だが……。

そこにいたエルはなぜか寝てはおらず、眉間にしわを寄せながら黙  
々と焚火に薪をくべていた。

「……え、エル？寝てたんじゃ……？」

状況が飲み込めず質問すると、暫しの間の後、彼女はこちらを見ず  
に言った。

「……ええ。寝てたわ。……焚火の火が消えるまではね」

抑揚のないその声は私にとって言いようのない恐怖を感じさせ、ど  
ういうわけか背中からはびっしりと冷や汗がでていた。

……いや、しかし、薪はここを立つ前に十分にくべておいたはず  
なのだが……。

その時の事を思い出す。

『善は急げ、ジールは立ち上がると焚き火に少し多く薪をくべ、誠  
意を示すため森へと歩を進めるのだった』 「二、彼の場合 最終  
段落 後ろから2行目より抜粋」

……そうだ、確かに私は薪をくべたはず。

……少しでは足りなかったのか？

悩むジールを見て、エルは溜め息をつきながら言った。

「……あんだねえ、薪をくべるのはいいけど、入れるなら太いの  
をいれなさいよね。細いのを沢山入れたところで、一瞬勢いが強く  
なるだけですぐ消えるでしょうが。おかげで熱いし、すぐ消えるし

で、結局私が薪をくべてるんだから。ったく。だいたいねえ・・・  
ぶーぶー、いいながら木をくべるエル。

「・・・」  
私にはもう彼女の言葉を聞くほかなかった。結果こうなつては、非  
は全てこちらにある。

その後暫くの間、彼女の長い長い説教を聞かされることになつてし  
まった。後半は焚火の件から離れ、愚痴のようなことを言っていた  
が、それもまたしょうがないことだと大人しく聞くことにした。

#### 四、二人の場合

「それにねえ、大体あんたは場の空気つてもんをねえ・・・」  
かれこれ気が付けば月はその姿を消し、東の空は明るさを取り戻そ  
うとしていた。

「ん？あら、もう朝じゃない」  
それに気付いたエルの顔は言いたいことを言いきり、すつきりと  
した表情であつた。

しかしそれとは対照的に、心身共に憔悴しきつていたのはジールだ  
つた。

彼は説教の間いつの間にか正座をさせられていた。それまで正座と  
いうものをしたことがなかったジールにとつてのそれはまさに拷問  
足の感覚は疾うに無くなり、説教の半分位からは意識も無くなるう  
としていた。

微かにエルが、空気が読めない、使えない、優男、死んで、償えと  
というような言葉を言っていたような気がしないでもなかったが、今  
は彼の足を襲っている未知の感覚によつてその全ては忘れ去られて  
いた。

そうまでしてその拷問をじつと耐えているのは、偏に自分のミスへ  
のせめてもの償いの為だった。

「結局全然眠れなかつたわね」

君の長い説教のせいでは、と言おうと思ったが本能と足の痺れがそれを言うことをなぜか許さなかった。

「……まあ、いいわ。取り敢えず話は以上。準備して出ましよう」

最初の間が怖かったが、ジールは頷くとよろよろと身支度を整え始めた。

「あ、そうだ。言い忘れてた」

彼女の言葉に体が反応し、最小限に抑えていた足への痺れが襲った。

「な、なんだイ？」

声を引きつっていた。

「あんたさあ」

彼女は両の目でジールを見据える。ジールはまた長い説教が始まるのではと内心ビクビクしていたが、それはジールの予想とは違うものであった。

「なんで、あの使徒を殺さなかったの？」

その言葉に一瞬ではあったが、ジールは足の痺れを忘れていた。また暫くの間が訪れる。

しかしその間、エルはずっとジールの両の目を捕らえていた。怒っているわけではない。ただこちらを見ているだけだというのに、ジールは何か威圧的なものを感じていた。

何かすぐ答えなくてはいけない。そう本能が告げていた。

「……使徒は殺したところで意味はないから、ね。無駄な恨みは買いたくないと思ったんだ。それに、あの使徒は協会から派遣されたわけでもなかったようだし、私達のことを知っているという感じでもなかった……」

気が付けば口は勝手にそんな言葉を紡いでいた。

・・・確かにそれは真実。嘘はついていない。

使徒は不死である。それも執念深い者が多い。あまり構うと厄介ごとになるのは間違いない。

だが、その言葉にはなぜか自分で言っていて納得しきれない部分があった。

そんなジールの心理を知ってか知らずか、彼女は暫くジルを見た後「・・・あ、っそ」

と何事もなかったかのように自分の荷物を整理し始めた。

「・・・」

彼女の視線から外れて初めて、ジルは心臓の動悸が激しいことに気付いた。

なぜあそこまで今の質問に動揺したのか自分でもよく解らなかったが、気が付けば足の痺れはどこかへと行っていた。

そうして荷物と呼ぶには少ない荷物をまとめてみると、

「あ、そうだった。また忘れてた」

と、エルがこちらをまた向いて言った。

先程のこともあり、また動悸が激しくなる。

次は何を言われるのかとある種の覚悟を決める。しかし彼女の言葉はまたしてもジールの予想とは違うものだった。

「一応、あのうるさい使徒を追い払ってくれたことは礼を言っておくわ。ありがとう」

そう言うと、彼女はまたそそくさと荷造りを始めた。

それは先程の拷問に比べたら一瞬の出来事であったが、ジルにとつてはその一言を聞いただけでもその甲斐はあったと思えるものであった。

東の空が徐々に明るくなるなか、二人は準備を終えると森の中へと進むのだった。



## 1、ツゴモリの月（後書き）

っていうか更新遅い！前に書いたのからどれだけ時間が経ってるんだ・・・（汗）

しかも解らない語句とかいっぱい出していたくせに、説明不足だし・・・（汗汗）とりあえずすみませんでした>（| |）<

次のお話でわからない語句とか使徒って何？とかエルとジールはなんぞや）ってのを書くころと思っっていますので、どうかここまで読んで下さった人（いるのか？）申し訳ないのですが、もう少しお待ちください>（| |）<  
2週間以内には書き終え・・・やっぱり3週間・・・と、とりあえずがんばります・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0903c/>

---

何が為に月は照らす

2011年1月23日02時15分発行